HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ジェームス・サマーズ ： 日本研究者，教育者としての再評価
著者	中川，かず子
引用	北海学園大学人文論集，41：95-122
発行日	2008-11-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

ジェームス・サマーズ
── 日本研究者，教育者としての再評価 ──

中　川　かず子

1　はじめに

ジェームス・サマーズ（1821―1891）は英国人のお雇い外国人教師として明治 6 年（1873）に来日，東京開成学校の英文学，論理学教授から始まり，新潟英語学校，大阪英語学校の英語教授を経て，明治 15 年（1882），最後の札幌農学校で契約満期となった。しかし，そのまま帰国をせずに東京築地の自宅に「欧文正鵠英語学校」を設立して日本で生涯を終えるという数奇な運命を辿った学者である。日本滞在は 20 年足らずであったが，その間多くの優秀な日本人知識人を育成し，英国よりも日本の研究史により深く名を刻んでいる。もともと本国の英国ではロンドン大学キングスカレッジ（King's College，1829 年創立，ロンドン市内）の中国語，中国語文学の教授であった。彼は 1853 年に大学の職に就き，後で述べるように，その後 20 年余り，中国語・中国文学の教育・研究と図書や新聞の編集に熱心に取り組み，日本への関心もあって，1863 年から 1865 年まで *The Chinese and Japanese Repository*（『支那日本雑纂』月刊誌，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，以下，繰り返し述べる際には *The Repository* と略す。）を共著で出版，その中で，〝Japanese Language and Grammar〟（日本語及び文典）という論文も 1864 年に発表している。さらに，1866 年には英国海軍軍医将校として中国と日本に勤務した F. V. ディキンズ（1838―1915）による初めての英訳『百人一首』(注1) の編集刊行に協力し，1870～1873 年には上で述べた *The Repository* の続編に当たる月刊誌 *The Phoenix*（鳳凰）全 3 巻を刊行し，中国と日本に関する事物を紹介するなど，日本からも注目されていた。ま

た，サマーズが当時英国に在住の長州藩士南貞助の協力を得て1873年に日本語の新聞『大西新聞』(注2)を刊行したことも日本ではよく知られている。

キングスカレッジ時代の中国語教授と日本語・日本文化への関心は，教え子の元駐日英国公使であり日本研究者でもある，アーネスト・サトウ(Sir Ernest M. Satow)を始め，W. G. アストンほかとのつながりを導き，1873年岩倉具視遣欧使節団との出会いを経て，キングスカレッジの職を辞して同年10月に一家で来日するに至った。

ジェームス・サマーズについての研究は，英学史研究者の重久篤太郎による「日本における沙翁研究の先駆としてのヂェームズ・サマーズ」(1928)，『日本近世英学史』(1941)がまとまった業績として知られている。戦後は昭和女子大学近代文学叢書第2巻(1957年初版)にも取り上げられており，明治期に日本の近代化に貢献した外国からの代表的文化人の一人であることは衆目の一致するところであろう。しかし，サマーズの日本における足跡，年譜を綴った伝記的書物はあるが，教育者として研究者としてどのような人物であったのか，謎の部分も多い。英国と日本の架橋の人々を紹介した『英国と日本』(イアン・ニッシュ編，2002年)には，アーネスト・サトウ，アストン，ディキンズ，チェンバレン等々，明治期のジャパノロジストとして活躍した英国人が取り上げられているにもかかわらず，なぜかジェームズ・サマーズはそこにはない。アーネスト・サトウの恩師であり，日本の多くの知識人を育てたサマーズも英国では評価が芳しくないのだろうか。

本稿では，サマーズのロンドン大学キングスカレッジ時代からお雇い外国人として日本の大学に勤務していた時までの諸資料や，編集者として関わった刊行物などから，サマーズの教育者，研究者としての人物像を探り，新たな真実を見出していきたいと思っている。

2　英国におけるジェームズ・サマーズ ── 中国語教授として，編集者としての活躍

サマーズの年譜については，上に掲げた重久篤太郎（1941）や『近代文学研究叢書第 2 巻』に示されるので，ここではあまり詳しく述べることはしないが，1853 年(注3) にロンドン大学キングスカレッジ中国語教授に就任するまでについて簡単に触れておきたい。

1828 年，サマーズは彫刻家であった Edward Summers と Catherine 夫妻の長男として英国中南部の Lichfield という町に生まれた。経済的な事情で大学進学を断念したが，外交官を志望し，東洋へ関心が向けられるようになった。20 歳の時（1848 年）に香港の St. Paul's College で英語教師として勤めながら，中国語の学習と研究に勤しんだ。しかし，1849 年 6 月の事件(注4) に巻き込まれた後，その 2 年後に彼はロンドンに戻ってくるのである。

2004 年秋，筆者はロンドン市内 Strand 地区にある，King's College Archives センターに所蔵されている，*Council Minutes* という大学の評議会議事録を見せていただいた。それによると，サマーズが赴任したのは 1853～1854 年度で，「選択科目 Chinese を担当，授業料は一学期（term），5 ポンド」と書かれている。彼の給料については，*The Chinese and Japanese Repository*（1967 年復刻版，Yushodo）の序文に，「固定給はなく，学生から集められた授業料に応じて支払われた」（同書編集者 D. Brown による。〝It carried no fixed salary, and payment depended on the fees collected from students.〟）とあり，大学教授の職に就いたとはいえ高い待遇を得ていなかったと想像できる。そのことは，サマーズが積極的に個人教授をしていたことと関係がありそうである。評議会議事録 1853～55 年度（F 巻）のサマーズに関する情報を探すと，次のような内容の記述がある。

> Summers 教授は中国語について個人教授の許可を求めて問い合わせをしてきた。（無断で 3 人の生徒に個人教授をしていたのに）許可をも

らったような印象を与えていたと批判を受け，今後，学校長（principal）の許可を受けない限り，個人教授を許可しないよう通告された。（p.25）（*原文は英語，筆者による日本語訳）

寄宿生（Boarders）を何人か自宅で指導してよいかとのSummers教授からの手紙に対し，学校長(principal)の許可により，Medical Dept.（医学部）の学生以外についてこれを認めた。(p.121)（*同上）

やはり，給料が安かったからか，彼は教授就任後にも個人教授を行っていたようである。その許可をめぐって時に大学側と対立することもあったものと見られる。

同書1855～1858年度のG巻には新しい大学で教える機会が得られたことの記述がある。

Summers教授は，Richmondの新しい大学Cavalry Collegeで中国語教授を行うための時間の許可を申請，大学評議会は学校長(principal)の推薦を取り付けることで事の処理にあたった。(p.353)
教授給料が80ポンド，加えて学生からの授業料が与えられた。(同上)

大学評議会はSummers教授に対して，Kings College以外で中国語を教えてはいけないと伝えた。(p.354)

大学からは度々個人教授の自粛を通告されていたようだが，この頃は教育・研究を積極的に進めていたと思われる。着任後間もなくまとめた『中国語及び中国文学の講義（*A lecture on the Chinese language and Literature delivered in King's College*）』（1853年）はロンドン大学SOAS（School of Oriental and African Studies）の図書館に所蔵されているサマーズに関する唯一の資料である。英国では，ロンドン大学King's Collegeの*Council Minutes*以外に，オックスフォード大学図書館に*The Chinese*

and Japanese Repository（1863～1865 年），上述のキングズカレッジ講義記録（1853 年），*The Phoenix*（1870―73 年），*The Taisei shimbun*（大西新聞，1873 年），“Education in Europe and Japan”, in *Japan Weekly Mail*（1879 年）が所蔵されている。これらの大学以外には英国ではサマーズの資料がほとんど見当たらない。英国オックスフォード大学はサマーズにとって特別所縁のあるところであったのかもしれない。というのは，彼が King’s College に 1853 年に採用された後，その年の 12 月にオックスフォード大学 Magdalen Hall に入学し，聖職者への道を志し，1863 年に聖職に就いている。その後，ハートフォード州のヒッチイン教会（Hitchin Church at Hertfordshire）の代理牧師に命ぜられたほか，教会の様々な要職に就いた経歴がある(注5)。また，それより以前に，サマーズは中国語の知識を生かし，*The Gospel of St. John in the Language of Shanghai, printed in Roman Type*（ローマ字版『上海方言訳約翰伝福音書』）の第一章を完成させ，1852 年にロンドンで出版している(注6)。オックスフォード大学に中国語講座が設置されるのは 1875～1876 年であることから，サマーズは同大学での中国語教授の機会を得ることはなかった。ロンドンで中国語教育の傍ら，宗教，文化に関する研究に興味を抱いていた彼は，その後，大英博物館助手の職を得ることになる。Council Minutes Vol. H（1858―1861）に，「Summers 教授は，大英博物館の製本・印刷部局助手としての職を許可される。」と記載されているが，1858 年に大英博物館及び印度省図書館に助手として勤務することになり，1863 年から 1865 年には上述の *The Repository*（『支那日本雑纂』）全巻の完成に至る。同書の編集，出版に際しては，当時，東洋学研究者で王立アジア協会（The Royal Asiatic Society）の事務局長（secretary）の職にあった，Rheinhold Rost 博士（1822―1896）の協力が大きかったようである(注7)。さらに，Rost 博士が 1869 年に印度省図書館に勤務し始めたことで，同書の続編とも言えるサマーズ編集の *Phoenix* 全巻（1870～1873 年）の刊行につながったものとみられる。これらの内容については次章で扱うことにする。

キングスカレッジにおけるサマーズの雇用形態については不明の部分も

多いが，契約雇用，学生数に応じた給与制などは資料から窺われる。評議会議事録Ⅴ巻（1861～1865 年）に契約期間の延長について次のように記載されている。

> 1862 年 12 月に雇用期限が終了するのを受け，Summers 教授は大学長の推薦を取り付け，三期目の 5 年契約として Chinese language and literature（中国語，中国文学）の教授に再任命された。(同 198 頁)

三期目の契約期間（1863 年～）からの十年間はサマーズの英国での活躍が目覚しい時期であった。印度省や大英博物館でのアジア関係資料の編纂に携わり，研究者や図書館員との知的交流を経験する中で，中国語だけでなく，日本研究資料を収集していくのである。先の *The Repository* の正式な表題が，*The Chinese and Japanese Repository of Facts and Events in Science, and Art, relating to Eastern Asia* となっているように，本書はアジアの政治，経済，文化一般の情報を多く集めた書物である。日本に関する情報も前半から現れているが，特に，中日の政治的関係，ヨーロッパから見た日本の政治情勢，国際（アジア）関係，中日と英国の関係などが中心であり，日本の対中政策についてはあまり好意的な論調でないものが目立つ。日本語に関する記事もあることはあるが，僅かしかない。特に，当時日本国内では，初代英国公使 R. オールコック（Sir Rutherford Alcock, 1809―1897）により 1863 年に日本の言語，社会，風俗についてまとめられた『大君の都』（*The Capital of the Tycoon*）が出版され高い評価を得ていた。英国内で日本学研究が盛んであったわけでなかったので，オールコックを越える日本研究の情報を得るのは大変だっただろうし，精神的なプレッシャーがかかっていたと想像される。復刻版 *The Repository* の編集者 Don Brown は序文の中で，フランス人日本研究者，L. ローニー（Léon de Rosny，パリ王立東洋言語学研究所教授）の日本に関する講義録（1863 年）の英語訳の *The Repository* への掲載が正式に認められて以来，記事内容に徐々に変化が見られるようになったと評している。次章で詳しく *The*

Repository 掲載論文のタイトル，概要について述べるが，第 5 号（1863 年 11 月）に初めて日本語に関する「講義」と仏教の宗派に関する小論文が現れる。そして，1864 年に入ると，サマーズ自身による日本語，日本の仏教や文化一般などの記事に加え，中国と日本の文化に造詣が深かった，英国海軍軍医の F. V. ディキンズ，外交官 E. M. サトウ，W. G. アストンなどの著名な「日本研究者」による日本文学，文化の論文が載るようになった。この頃から，同書の学術的価値に対する評価が上がり，それとともにサマーズ自身も日本文化への関心を一層深めていったものと思われる。

The Repository の最終号である第 29 号（1865 年 12 月）が出てから続編の *The Phoenix* が出版されるまでに 5 年間の空白があるわけだが，その間もサマーズは King's College の中国語教授をしながら，上述の F. V. ディキンズの *The Repository* 20 号から 28 号まで連載した「百人一首〝Japanese Odes-Hyak Nin Is'shiu″」刊行に向けて協力した。1866 年にロンドンの Smith, Elder, & Co. から出版されたディキンズ著 *Hyakunin Isshu, or Stannzas by a Century of Poets, Being Japanese Lyrical Odes* は日本の古典文学を世界で始めて完全に英訳し一冊の本としたものだが，その序文にサマーズの協力なくしては完成できなかったという内容のサマーズへの謝辞が記されている。このほかにも，1868 年には中国語を含む外国語教科書の監修を行ったり，Sir John Francis Davis による，*The Poetry of the Chinese* の再版（1870 年）に協力したり(注8) するなど，サマーズはその頃すでに学術書の編集，出版に自身の才能を存分発揮していたことが窺われる。

サマーズは 1870 年 7 月に *The Phoenix* と名前を変えて再び中国，日本を中心に東アジアの国々の政治，文化，社会を伝える学術雑誌の刊行に成功した。前述したとおり，しばらく空白の期間があったものの，印度省図書館の R. Rost 博士の人的，物的資源の後押しを受けて内容の充実を図っていったものと見られる。サマーズ自身，*The Phoenix* の序文に R. Rost の編集協力があったからこそ東洋の宗教関係の学術的な資料，論文，取り分け仏教関連の研究論文が収められたと述べ，Rost 氏に謝意を示している。

このことと関係があるのか，1967 年の復刻版（Yushodo, Tokyo; 原本は〝Kraus Reprint Limited, Nendeln, Liechtenstein〞で刊行）ではⅠ，Ⅱ，Ⅲの 3 巻のうち，ⅡとⅢのタイトルがⅠと少し異なっている。第 1 巻の表題は，*The Phoenix, A Monthly Magazine for China, Japan & Eastern Asia*（1870 年 7 月～1871 年 6 月）で，第 2 巻（1871 年 7 月～1872 年 6 月）と第 3 巻（1872 年 7 月～1873 年 6 月）の表題には〝India, Burma, Siam〞が〝China, Japan & Eastern Asia〞の前に新たに加えられており，印度ほか南アジアの国々等広い範囲からの情報が集められている。

日本についての情報，論文については，第 1 巻ではアイヌ民族，アイヌ語，文学，政治と宗教，酒造り，神話などのテーマがあり，サマーズのほか，E. M. サトウ，ホフマン（蘭）などの日本研究者も投稿している。第 2 巻では，文学，歴史，仏教，神話，昔話，日本諸事情，伝統文化，日本語文典，語学教授書書評，ローマ字問題，慣用語句など，日本に関する項目がかなり多い。しかも，E. M. サトウ，アストン，L. ローニー（仏），ホフマン，菊池大麓（16 頁参照）といった，当時第一線で活躍していた研究者，学者達からの論文，書評，解説が集められている。第 3 巻も日本事情，日本語学習，慣用句，英和―和英辞書，語学教授法，琉球研究などのテーマが並び，E. M. サトウはここでも複数回寄稿しているのが確認できる。*The Repository* 復刻版（1967）の序文によれば，サマーズは本誌で取り上げた日本に関する事象について，ハリー・パークス駐日英国公使（1865 年より）が横浜や神戸の英字新聞，あるいはドイツ語新聞から得た情報を本国の外務省（Foreign Office）に送ったものを素材としたようである。『パークス伝』（1894 年，F. V. ディキンズ原著，東洋文庫 429）によると，ハリー・パークスは 1871 年夏から 1873 年 2 月まで賜暇のため英国に滞在していたという。サマーズは外交官のサトウやアストンらと親交を深めていたので，パークスともつながりがあったものと想像できる。こうして世界有数の日本，中国研究者，東洋研究者からの学術論文も含まれた高いレベルの評価を得た *The Chinese and Japanese Repository* と *The Phoenix* は有能な編集人としてのサマーズの英国時代の大きな足跡となり，日英の架け橋とし

ての存在を意識づけるものである。

サマーズの活躍は日本政府関係者に知られており，パークスと通訳のアストンも同行した訪欧岩倉使節団と接触，サマーズは岩倉具視卿から日本の大学に勤務できる外国人教師の紹介依頼を受けた。訪問団がロンドンに滞在したのは 1872 年 8 月から 12 月までであり(注9)，その間に彼らは何度か接触する機会があった。その頃彼は長州藩の南貞助ほかロンドン在住の日本人留学生との交流を通じ，日本への関心を募らせていたことは理解できる。サマーズは 1873 年 6 月 2 日にロンドンで駐日日本公使の寺島宗則との間に雇用契約を結んだ(注10)。しかし，勤務校の King's College にはまだその時何も伝えていなかった。評議会議事録に何点か当時の大学とのやりとりを示す資料が残っている。まず，同年 6 月 27 日付けのサマーズの大学宛の手紙があった。差出人サマーズの住所は，〝3 George Yard, Lombard Street〞とあり，サマーズが日本政府より英文学教授の依頼を受けたので，2 年間だけ行かせてほしいという内容であった。実際，議事録には次のような記述が残っている。

> 日本の大臣より 2 年間江戸の大学で英文学の教授をするよう任命されたので，この間に中国語の学生が入学しても責任をもって指導に当たるという条件で，休暇を願いたい旨のサマーズ教授からの手紙があった。しかしながら，評議会はこれを断った。（July 11, 1873；464 頁）

20 年も勤務した King's College との関係があったので，2 年後には復帰を期待して手紙を書いたと思われるが，意外にも大学の対応は冷たかった。〝It was resolved that the Council could not comply with Mr. Summer's request.〞（同，p.464）という表現が示すとおり，事務的な対応しかとらなかった大学の態度が感情的にすら感じられる。

> 日本へ行くことの許可を求めたが断られたサマーズ教授は，日本に向けてすでに出発したと報告された。中国語教授のポストは「空き」と

なり，通常の方法で後任教員を公募することになった。

（October 10, 1873；477頁）

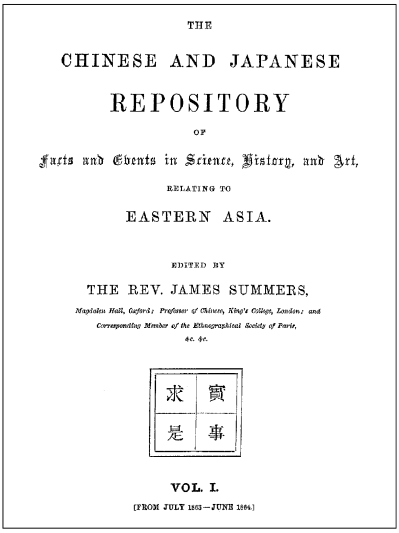
サマーズは当時46歳，幼い4人の子供と夫人を伴い，7月には英国を出発し3ヶ月あまりを費やして十月十日に横浜に到着する。「お雇い外国人」のサマーズがなぜその後も日本に住み続けたのか，その謎を解く鍵が最後の勤務校King's Collegeとの関係にあった。これまでKing's College時代のことはサマーズの関係者から「中国語教授」以外あまり語られることはなかったが，彼自身，人に知られたくない心の傷を負っていたのかもしれない。

3　日本研究への道 ── ジャパノロジストとしての業績

これまで見てきたように，サマーズが日本への関心を抱き，日本へ通ずる人脈を築いていくのは，月刊誌 *The Chinese and Japanese Repository*（1863―1865），The Phoenix（1870―1873）の刊行時期であったと思われる。このことは，両雑誌に収められている話題や執筆者の多彩な顔ぶれを見れば納得がいく。以下，サマーズの手がけたこれら二種の月刊誌と来日した後で編集協力や投稿を行った，*Transactions of Asiatic Society of Japan*（1873―1902/Vol. 1～29；日本亜細亜協会紀要）から日本語・日本文化に関する論文を取り上げ，彼が日本研究への関心を深めていく過程を見ていくことにする。

1）*The Chinese and Japanese Repository*
（1863年7月～1865年12月）

The Chinese and Japanese Repository 第1号（1863年7月）の序文にサマーズは〝Introductory Essay on the Scope and Objects of the Chinese and Japanese Repository″と題して，雑誌刊行の目的と展望について記している。その中で，中国ではよく知られていた *The Chinese Repository* に


THE

CHINESE AND JAPANESE

REPOSITORY

OF

Facts and Events in Science, History, and Art,

RELATING TO

EASTERN ASIA.

EDITED BY

THE REV. JAMES SUMMERS,

Magdalen Hall, Oxford; Professor of Chinese, King's College, London; and Corresponding Member of the Ethnographical Society of Paris, &c. &c.

求是 實事

VOL. I.

[FROM JULY 1863—JUNE 1864.]

図1　The Chinese and Japanese Repository Vol. 1（1863-1864）1967年復刻版，Yushodo

ついて，広東で1833年に出版された雑誌であり，編集者の尽力で英国人宣教師R. モリソンのような著名人も含め，中国の歴史や言語に関する優れた論文を多く掲載していたが，英国ではあまり知られていなかったため，そのような雑誌を英国内で刊行したいという願望があったとサマーズは述べている。さらに，時代が進み，日本では1859年に横浜，長崎，函館の開港が実現し，英国と中国だけでなく，日本がどう隣国の中国や英国に関わっていくかということに注目し，日本の歴史文化に対する理解を深めようという想いから，雑誌の表題に〝Japanese〟を加え，*The Chinese Repository* の続編として本誌が出版されたと説明する。雑誌を埋める論文のテーマに政治，国際関係のものが多く見られるが，サマーズの意図としては，どちらかというと，純粋に中国，日本を始め，アジア諸国の人々の文化形成の要因を探る意味で本誌編集に積極的に乗り出したものと見られる。

同じ号の第5記事に〝Literary Notice〟（学術情報）として，これまでのヨーロッパにおける日本語，中国語研究の書誌情報と書評が述べられて

いる。Victoria主教の〝*Ten Weeks in Japan*″，初代駐日総領事を務めたラザフォード・オールコックの〝*Capital of the Tycoon*″（『大君の都』），S. Osborn海軍大佐の〝*Cruise in Japanese Waters*″，〝Japanese Fragments″さらに，フランスの日本研究者であるLéon Pages（L. パジェス）とLéon de Rosny（L. ローニー）の名前を挙げている。

第2号（1863年8月）には言語，文学に関する記事はない。その中で興味深い記事として，サマーズの書いた第6記事〝Notices of the Political Aspects of Affairs in China and Japan, and Summary of the Events of the last three months relating thereto″（最近3ヶ月の中国と日本における政治的側面）を挙げることができる，これは，英字新聞に掲載された記事を紹介したものである。日本と英国の関係が危ぶまれる出来事（生麦事件など）を憂慮し，さらに，サマーズのかつての教え子であったE. M. サトウが翻訳した，外国人問題に対する天皇から将軍への勅書についても解説している。第3号（9月），第4号（10月）に日本語・日本事情関連の記事は3本（11本中）あるが，そのうち2本が政治的，国際関係（当時の事件をめぐる英国と日本の政治的対立）の話題である。もう一本は「中国語と日本語の話し言葉へのローマ字の適応」であるが，内容はほとんど中国語についてである。まだその頃のサマーズの日本語研究は十分に進んでいなかったものと想像できる。

本誌に初めて文学的な記事が掲載されるのが，同年第5号（11月3日発行）のLéon de Rosnyによる講演記録である。日本でもよく知られる，フランスの日本研究者L. ローニーが1863年5月にパリ大学東洋語学校初代教授となった時の記念講演で，記事のタイトルが，*Opening Lecture on the Japanese Language, delivered May 5th, 1863, by Professor M. Léon de Rosny, at the Ecole Impériale et Spéciale des Langues Orientales Vivantes, Paris* となっている。その中で，J. ロドリゲスの日本文典，辞書類がヨーロッパ日本研究者に翻訳されたこと，I. ティチング（Titshingh, 1745―1812），シーボルト（1796―1866），ホフマン（1805―1878），D. クルチウス（D. Crutius, 1813―1879）など長崎出島のオランダ商館関係の東洋

研究者からヨーロッパへの伝来，さらに初代駐日ロシア領事のゴシケビッチ（Goskevich, 1814―1875）についても言及している。これ以外の日本関連では，同じ号に *The Chinese Repository* の再録となる「日本の近代史における主要な出来事と仏教の宗派」についての論文が掲載されている。また，英国と日本の薩摩藩のいわゆる薩英戦争の勃発で鹿児島が陥落した，という見出しで始まる，*The London and China Telegraph* の記事を紹介している。また，その記事の最後には「書誌情報」として，ラザフォード・オールコックの *Familiar Dialogues in Japanese, with English and French translations* がパリで出版されたことを紹介し，それについて，J. リギンズ（J. Liggins, 1829―1912）による *Familiar Phrases in English and Romanized Japanese*(注11) がすでにあるが，オールコックのほうが江戸に住んでいるので言葉はもっと洗練されたものであろう，という編集者のコメントも付している。

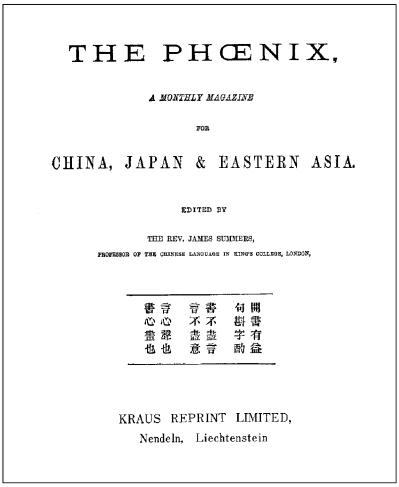
サマーズ自身の日本語研究が本格的に始まるのが 1864 年 11 月に発表した〝The Japanese Language and Grammar〟であろう。次号の 12 月号にも続編が掲載されている。その概要は次の通りである ―― 前半は日本語の文字体系，続いて，かな文字音節（いろは／あいうえお）表と日本語音声を示し，後半は文法体系として次の 5 項目 ――⑴格と名詞，⑵接辞，⑶助数詞，⑷代名詞，⑸動詞 ―― を挙げて説明している。「動詞」はさらに，①テンス（現在，過去，完了，未来），②ムード（命令アレ，接続アレバ／～タレバ，仮定アラバ，不定詞アル（連体形），分詞アッテ），③肯定・否定（アル／アラヌ・～ズ），④複合的用法（～テアル／～テアッタ）という分類を示している。次号の 12 月 12 日付けの記事は，〝Japanese Grammar--The Formation of Tenses Confirmed〟というタイトルで 2 頁にわたり動詞の「時制」（テンスのみならず，ムードについても記す）を説明している。そこには，sakebi（叫び），sonemi（嫉み）のような語根 b，m は n 音便に（sakenda, sonenda），語根 g は i 音便（awoida, kaita）になることのほか，促音便について示している。また，命令，仮定，接続，未来（未然）のムードの活用も例示している。この記事に続き，〝Hints to Students

of Learning the Japanese Language″（p.216-p.222）というF. V. ディキンズの寄稿による体験的日本語学習法が掲載されており，本誌の日本語に関する記事が豊かになってきたことを印象付ける。

第3巻（1865年1月～）に入るとまた新たな特徴が見える。全体的に政治的なタイトルがほとんど影を潜め，日本に関連する記事は「日本の昔話」，「鎌倉の寺」，「日本の地理」，「白書の概要」，「歴史年表」といった日本事情紹介が少し見られる。その中で目を引くのは，第20号（1865年3月）から第28号まで連載したF. V. ディキンズによる〝*Japanese Odes, translated*″（日本の抒情詩――「百人一首」の翻訳）である。これが翌年単行本として世界初の百人一首（英訳）が刊行される。*The Chinese and Japanese Repository* の誌上で9回にわたって翻訳され，出版に至ったのもサマーズの指導，協力(注12)の大きさを示すものであろう。F. V. ディキンズの連載と同様に，E. M. サトウによる *Diary of a Member of the Japanese Embassy* が第24号（1865年7月）から第29号（同年12月）まで6回にわたり掲載されている。サトウは晩年，*A Diplomat in Japan*（1921年ロンドン刊）という伝記的書物をまとめたが，本誌の連載もその一部をなすものである。サマーズはすでに駐日英国公使館に勤務していたサトウとのつながりを大切にし，日本の社会，政治，文化についての情報を広く得ていたものと思われる。

2）*The Phoenix*（1870年7月～1873年6月）

第一号には序文，巻頭の挨拶が編集者サマーズにより記されている。前章で触れたように，*The Phoenix* の日本紹介記事では，日本語あるいは日本研究者として馴染み深いE. M. サトウ，W. G. アストン，J. J. ホフマン，L. ローニーほかが協力している。第一号の巻頭記事はサトウによる論文〝The Ainos of Yezo″（「蝦夷のアイヌ」）である。サトウはその中で，函館の近くで出会ったアイヌの人々の衣食住について紹介し，アイヌ語についても文法（数詞，代名詞，名詞，形容詞，動詞，文構造）説明を試みている。第一巻には「日本の政治体制の変化」というタイトルでサマーズ自



THE PHŒNIX,

A MONTHLY MAGAZINE

FOR

CHINA, JAPAN & EASTERN ASIA.

EDITED BY

THE REV. JAMES SUMMERS,

PROFESSOR OF THE CHINESE LANGUAGE IN KING'S COLLEGE, LONDON,

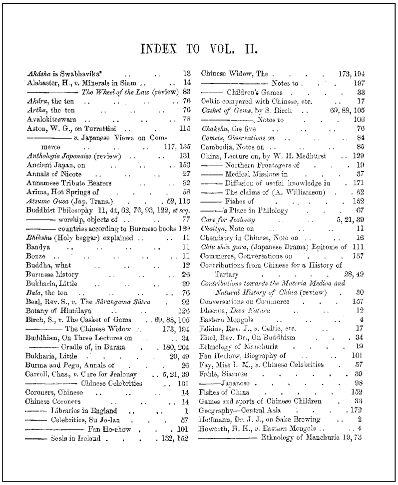
書言 言書 句開
心心 不不 斟書
畫聲 盡盡 字有
也也 意言 酌益

KRAUS REPRINT LIMITED,
Nendeln, Liechtenstein

図 2　The Phoenix Vol. 1（1870–1872）
1967 年　復刻版，Yushodo

身が「大政奉還」について述べているもの（第 1 号）とハリー・パークス駐日英国公使の文書や新聞記事の翻訳を通し「大名一覧」や「キリスト教の解禁」といった情報を提供（第 2，3，5，6 号）したものがあるが，このほか，ホフマンの〝Rice-Beer, or Sake Brewing in Japan〞（「日本の米酒，酒醸造」，第 11 号，1871 年 5 月）という興味深い記事もある。記事に書かれたホフマンの当時の肩書きは，〝Ph.D., Professor of Japanese at the University of Leiden〞（ライデン大学日本学教授，博士）となっていて，この記事はライデンで発表されたものをライデンの James Perrin 氏が英訳しホフマンの監修を経たという注釈が付されている。百科事典『和漢三才図会』(1712 年)などを参考資料として詳しく解説している。この記事は第 13 号（1871 年 7 月）に続編が掲載されている。

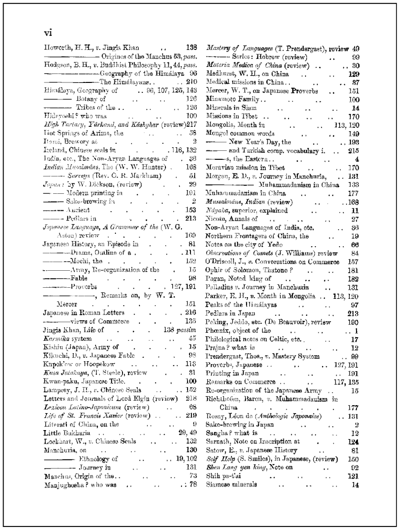
第二巻の特徴として，サマーズによる日本語学習シリーズのほか，アストンの文法書，書評，ヘボンの辞書の紹介，日本語慣用表現等日本語を取り上げたものが他の巻よりも多い(図 3 － 4 参照)。日本語，日本研究の主だった内容を次に見ていくと，まず，第 17 号（1871 年 11 月）に，〝An Episode in Japanese History〞と題して，E. M. サトウによる『太閤記』



INDEX TO VOL. II.

Akásha is Swabhavika' 13
Alabastor, H., *v.* Minerals in Siam 14
——— *The Wheel of the Law* (review) 83
Akára, the ten 76
Artha, the ten 76
Avalokiteswara 78
Aston, W. G., on Turrettini 115
——— *v.* Japanese Views on Commerce 117, 135
Anthologie Japonaise (review) 131
Ancient Japan, on 153
Annals of Nicote 27
Annamese Tribute Bearers 32
Arima, Hot Springs of 58
Atsume Gusa (Jap. Trans.) . . . 52, 115
Buddhist Philosophy 11, 44, 62, 76, 93, 122, *et seq.*
——— worship, objects of 77
——— countries according to Burmese books 189
Bhikshu (Holy beggar) explained 11
Bandya 11
Bonze 11
Buddha, what 12
Burmese history 26
Bukharia, Little 29
Bala, the ten 76
Beal, Rev. S., *v.* The *Sûrangama Sûtra* . 92
Botany of Himálaya 126
Birch, S., *v.* The Casket of Gems .. 69, 88, 105
——— The Chinese Widow .. 173, 194
Buddhism, On Three Lectures on 34
——— Cradle of, in Burma . . 180, 204
Bukharia, Little 29, 49
Burma and Pegu, Annals of . . . 26
Carroll, Chas., *v.* Cure for Jealousy .. 5, 21, 39
——— Chinese Celebrities .. 101
Coroners, Chinese 14
Chinese Coroners 14
——— Libraries in England 1
——— Celebrities, Su Jo-lan . . . 57
——— Fan Ho-chow . . . 101
——— Seals in Ireland 132, 152
Chinese Widow, The 173, 194
——— Notes to . . . 197
——— Children's Games 33
Celtic compared with Chinese, etc. .. 17
Casket of Gems, by S. Birch .. 69, 88, 105
———, Notes to 106
Chakshu, the five 76
Comets, Observations on 84
Cambodia, Notes on 85
China, Lecture on, by W. H. Medhurst .. 129
——— Northern Frontagers of 19
——— Medical Missions in 37
——— Diffusion of useful knowledge in . 171
——— The claims of (A. Williamson) . . 52
——— Fishes of 152
———'s Place in Philology 67
Cure for Jealousy 5, 21, 39
Chaitya, Note on 11
Chemistry in Chinese, Note on 16
Chiu shin gura, (Japanese Drama) Epitome of 111
Commerce, Conversations on 157
Contributions from Chinese for a History of Tartary 28, 49
Contributions towards the Materia Medica and Natural History of China (review) . 30
Conversations on Commerce 157
Dharma, *Diva Natura* 12
Eastern Mongols 4
Edkins, Rev. J., *v.* Celtic, etc. .. 17
Eitel, Rev. Dr., On Buddhism 34
Ethnology of Manchuria 19
Fan Hechow, Biography of 101
Fay, Miss L. M., *v.* Chinese Celebrities . 57
Fable, Siamese 39
———Japanese 98
Fishes of China 152
Games and sports of Chinese Children . 33
Geography—Central Asia 172
Hoffmann, Dr. J. J., on Sake Brewing .. 2
Howorth, H. H., *v.* Eastern Mongols 4
——— Ethnology of Manchuria 19, 73

図3　The Phoenix Vol. II Index（1）
1967年　復刻版



vi

Howorth, H. H., *v.* Jingis Khan .. 138
——— Origines of the Manchus 53, *pass.*
Hodgson, B. H., *v.* Buddhist Philosophy 11, 44, *pass.*
———Geography of the Himálaya 96
———The Himálayans.. .. 210
Himálaya, Geography of .. 96, 107, 125, 143
——— Botany of 126
——— Tribes of the 126
Hideyoshi? who was 100
High Tartary, Yárkand, and Káshghar (review)217
Hot Springs of Arima, the 58
Hami, Brewery at 2
Ireland, Chinese seals in . . . 116, 132
India, etc., The Non-Aryan Languages of . 36
Indian Musalmáns, The (W. W. Hunter) . 168
——— *Surveys* (Rev. C. R. Markham) . 51
Japan: by W. Dickson, (review) . . 29
——— Modern printing in 191
——— Sake-brewing in 2
——— Ancient 153
——— Pedlars in 213
Japanese Language, A Grammar of the (W. G. Aston) review 169
Japanese History, an Episode in 81
———Drama, Outline of a 111
———Mochi, the 152
———Army, Re-organization of the . 15
———Fable 98
———Proverbs 127, 191
———, Remarks on, by W. T. Mercer 151
Japanese in Roman Letters 216
———views of Commerce 135
Jingis Khan, Life of . . . 138 *passim*
Karmika system 45
Kishiu (Japan), Army of 15
Kikuchi, D., *v.* Japanese Fable 98
Kupok'ow or Hoopekow 113
Kusa Jataka, (T. Steele), review . . 31
Kwan-paku, Japanese Title. 100
Lamprey, J. H., *v.* Chinese Seals 152
Letters and Journals of Lord Elgin (review) 218
Lexicon Latino-Japonicum (review) .. 68
Life of St. Francis Xavier (review) 219
Literati of China, on the 9
Little Bukharia 29, 49
Lockhart, W., *v.* Chinese Seals 132
Manchuria, on 130
——— Ethnology of 19, 102
——— Journey in 131
Manchus, Origin of the.. 73
Manjughosha? who was .. .. .: 78
Mastery of Languages (T. Prendergast), review 49
——— Series: Hebrew (review) .. 99
Materia Medica of China (review) 30
Medhurst, W. H., on China 129
Medical missions in China.. 37
Mercer, W. T., on Japanese Proverbs .. 151
Minamoto Family.. 100
Minerals in Siam 14
Missions in Tibet 170
Mongolia, Month in 113, 120
Mongol common words 149
——— New Year's Day, the 193
——— and Turkish comp. vocabulary i. .. 215
———s, the Eastern.. 4
Moravian mission in Tibet 170
Morgan, E. D., *v.* Journey in Manchuria, .. 131
——— Muhammadanism in China 133
Muhammadanism in China 177
Mussalmáns, Indian (review) 168
Náyaka, superior, explained 11
Nicote, Annals of 27
Non-Aryan Languages of India, etc. .. 36
Northern Frontagers of China, the .. 19
Notes on the city of Yedo 66
Observations of Comets (J. Williams) review 84
O'Driscoll, J., *v.* Conversations on Commerce 157
Ophir of Solomon, Thatone? 181
Pagan, Noted king of 182
Palladius *v.* Journey in Manchuria .. 131
Parker, E. H., *v.* Month in Mongolia .. 113, 120
Peaks of the Himálayas 97
Pedlars in Japan 213
Peking, Jeddo, etc. (De Beauvoir), review 100
Phœnix, object of the 1
Philological notes on Celtic, etc.. .. 17
Prajna? what is 12
Prendergast, Thos., *v.* Mastery System .. 99
Proverbs, Japanese 127, 191
Printing in Japan 191
Remarks on Commerce 117, 135
Re-organization of the Japanese Army .. 15
Richthofen, Baron, *v.* Muhammadanism in China 177
Rosny, Léon de (*Anthologie Japonaise*) .. 131
Sake-brewing in Japan 2
Sangha? what is 12
Sarnath, Note on Inscription at . . 124
Satow, E., *v.* Japanese History .. 81
Self Help (S. Smiles), in Japanese, (review) 150
Shen Lang yen king, Note on .. 92
Shih pa-t'ai 121
Siamese minerals 14

図4　The Phoenix Vol. II Index（2）
1967年　復刻版

の一部を紹介する記事がある。書き出しのところで，登場人物の名前をローマ字で表記した場合の発音について，母音はイタリア語やドイツ語のように，子音は英語のようにするとよいと説明している。当時の日本国内ではローマ字論争が盛んになり始め，サトウ，B. H. チェンバレンらも文字論争に加わり意見を発表したほどであり，ローマ字の発音，表記には関心が高かったことがうかがえる。第18号には，当時英国留学中であった菊池大麓(注13)の書いた，日本の昔話〝The Fox and the Badger〟（きつねとくま）が載っている。書評については，第2巻に日本に関連する興味深いものがいくつかある。日本にも影響を与えた外国語教授法のマスタリーメソッドの創始者，Thomas Prendergast著 *Mastery Series: Hebrew* についてコメントしている。15号にもマスタリーメソッドについての書評を載せ，改革的な教授法について積極的な評価を行ったが，ヘブライ語に応用することについては，「ほとんど死語に近いヘブライ語を最新の口語教授法でどうやってマスターするのか？」と疑問を呈している。21号には日本人の中村敬太郎教授（中村正直）により翻訳された *Self Help*（by Samuel Smiles,

『西国立志編』）の書評を，H. W. Freeland 卿が書いている。当時 King's College も含め，英国に留学していた日本人の若者の優秀さを誉め，翻訳者に対する評価も高いとした上で，日本語訳が今後日本の若者達へ大きな影響を及ぼすことに期待感をもって述べている。

サマーズが当時駐日英国公使館通訳だった W. G. アストンとも親しく情報，学術交流を行っていたことはこれまでのいくつかの資料からうかがえるが，本誌第 2 巻にアストンによる記事，〝Japanese　Proverbs″，〝Review on *Anthologie Japonaise*″ のほか，サマーズによるアストン文語文典（*A Grammar of the Japanese Written Language: with a short Chrestomathy*）の書評が掲載され，文学を含めたより幅広い分野からなる学術雑誌としての体裁を整えるようになった。以下，これらの内容の一部を紹介する。まず，〝Japanese Proverbs″は第 20 号，21 号(1872 年 2 ～ 3 月)，23 号(同年 5 月)，26 号に連載されたもので，大変好評であったと記されている。第 20 号では，「年年歳歳花相似たり」から始まり，「貧すれば鈍する」「飲めや歌えや一寸先は闇」「鰯の頭も信心から」など 40 句をアストンが二人の日本人の監修の下で集めた。そして，その一部分の解説が 21 号に掲載され，23 号では主としていろはがるたから「犬も歩けば棒」(41)「塵も積もれば山となる」(42)「腐っても鯛」(59)など新たに 19 句，続く 23 号ではさらに 15 句が収集された。最初のことわざ特集が出た同じ 2 月号にアストンは L. ローニー著 *Anthologie Japonaise* に対する興味深い書評を書いている。その詩歌集は，すでにパリ東洋学研究所日本学主任教授であったローニーの代表的著作であり，主として万葉集，百人一首ほか鎌倉時代あたりの作品から歌を集めて解説したものである。アストンは，日本の詩歌を集め，美しく整った文字を印字し，翻訳と解説をつけたこの作品を賞賛し，ローニーの苦労を讃えた上で，少し批判的なコメントも示している。それは，全体的には意味も間違っていなく，エレガントな翻訳が付されているが，細かな言葉の原義にさほど注意が向けられなく，正確さに欠けるため，研究者，学生に適するレベルに達していないというのである。その例として，「出でていなば　主なき宿となりぬとも　軒端の梅よ　春を忘るな」と

いう句の中で「いなば」「なりぬとも」という未来時制（仮定）を過去時制に解釈したことを問題にしている。このほかいくつかの語彙や表現の問題を指摘している。全体的に日本の詩歌，語彙をエレガントに表現し賛美しているローニーに対し，言葉の用法に厳格なアストンの見方の違いが現れて興味深い。この「書評」からもうかがえるように，アストンは外交官という職業に就きながらも，言葉に対する正確で体系的な捉え方をする研究者である。そのアストンが「中国語，日本語の文法学者について初めて聞いた」とサマーズに言わせるほど日本の言語資料を徹底的に集め分析しまとめた *A Grammar of the Japanese Written Language: with a short Chrestomathy* について，サマーズは第22号（1872年4月）に書評を寄せている。彼はアストンの文語文典の出版に関心があったのであろう。そのことを裏付けるように，アストンは本書序文に，中国語と日本語の活字の印刷を行うのにサマーズの助言があったから刊行が可能となったということを記している —— 〝The author's best thanks are due to Professor J. Summers' advice in supervising the printing and for the use of his valuable forms of Chinese and Japanese type.〟本書の内容について，サマーズは「日本語の文法に関する日本人による主要な業績を取り上げた最初の研究を含むもの」とアストン自身の記述を引用して，その成果を評価している。また，アストンが「歌学」（The Art Poetica との訳）から言語資料を収集し，16世紀のイエズス会の宣教師達でも成し遂げられなかった研究の道を切り開いたことに感謝の意を示すとともに，当時ヨーロッパの日本文法研究で高い評価を得ていたオランダのJ. J. ホフマンの文法論について，あまりの細かな文法記述のために実用的レベルに程遠いと批判的な意見を述べ，アストンの日本語研究レベルの高さを印象付けている。

サマーズ自身もアストンに刺激されたのか，〝Practical Lessons in Japanese〟（実用日本語）を7月号，8月号，9月号，11月号(25，26，27，29号）に連載した。始めの号で日本語の発音について説明があり，続いて文法を例文とともに解析を試みている。不思議なことに，8月号からの例文は，のちにE. M. サトウがまとめた『江戸口語』（*Kuaiwa Hen* ——

Twenty-Five Exercises in the Yedo Colloquial）の会話文によく似ている。サトウの会話書は国語学史においても取り上げられるほどよく知られているが，サマーズの実用日本語研究が 1872 年 7 月であるから，サトウの著書刊行（1873 年）よりも先である。つまり，サトウの会話文はサマーズの会話文を参考にしたものと考えることも可能である。類似した会話文の例を挙げると，〝Anata no hon wo sakujits yomimashita″〝kono hon wo yomimasho″〝Kono hon wo yomito gozarimas″〝Kono hon wo yomu koto wa muzukashiku gozarimas″（以上，サマーズの例文から）などで，「読みました」「読みましょう」「読みとうございます」「読むことは難しくございます」のように，連続して同じ動詞の用法が示される。サトウの *Kuaiwa Hen* においても，「明日行こうと思う」「昨日行きました」「行こうじゃないか」「行きたいか」など「行く」の活用に関連して多くの用例が示されている。

The Phoenix が日本と英国，あるいはヨーロッパをつなぐ学術情報誌であったことは間違いない。1872 年 11 月号（29 号）では日本で活躍していた J. C. ヘボンの『和英語林集成』（*A Japanese-English and English-Japanese Dictionary*）の第二版（1872 年，上海版）が紹介され，1873 年 4 月～ 5 月号には森有礼（当時の駐米日本大使）による〝Outline of Japanese History″（日本の歴史概略），同じく 5 月号にはサトウの〝Notes on Loo-choo″（琉球について）といった日本の重要な人物，あるいは著作が登場するなど，*The Phoenix* の学術雑誌としてのレベルの高さ，編集長であるサマーズの実力が証明されたといっても過言ではないだろう。

3）Transactions of Asiatic Society of Japan
（1873―1902／日本亜細亜協会紀要）

Transactions of Asiatic Society of Japan（以下，*Transactions* と略す）は，明治の初め頃から約 30 年間にわたり，日本で活躍したジャパノロジストが中心となって論考を集めた紀要であるが，J. サマーズも 1873 年に来日した後，E. M. サトウ，W. G. アストン，B. H. チェンバレンといった協会

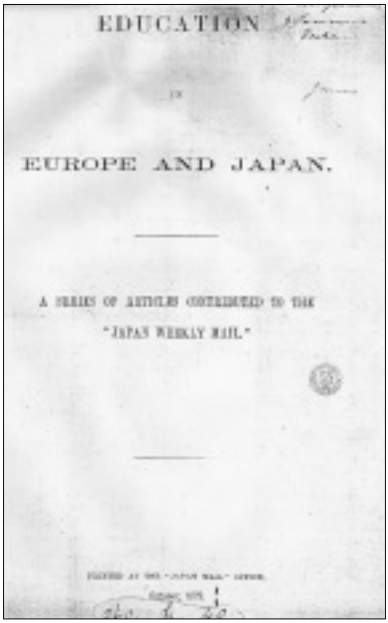
の中心メンバーから入会の誘いを受けたと思われる。来日直後には論文が収録されていないので，東京開成学校，新潟英語学校を経て大阪英語学校の英語学校に赴任した後に会員となったようである。彼の最初の文章は1879年（第7巻）6月に受理された〝Notes on Osaka〟という，大阪の自然,文化の歴史を概説した17頁にわたる研究ノートで,参考文献として，その前年に学校の教育用に作成された問答形式の刊行物『大阪府管内地誌略問答』と数種類の地図（「浪速上古図説」,「浪華古図」ほか）を挙げている。サマーズが協会会員として初めて投稿したと思われるこの論文の序論に,「大阪についての歴史文化の全貌をまとめるのは難しいため，自身の関心のある事柄に関することや重要な史跡を主に取り上げた。正確な記述に努めたが，もし誤りの恐れがある場合には，協会の識者からのコメントを求めたい」(375頁）と述べている。かつて，英国では大きな学術雑誌の編集者であったサマーズも，来日して英語学校の文学，語学の教師として多忙な日々を送っていたからか，来日してからしばらく研究生活から遠ざかっていたようである。日本亜細亜協会の会員になれたことを「名誉なこと」と述べている。この後，1890年までの会員名簿録に名前が載っているが，没年の1891年以降は名簿から外れ，名誉会員にもなっていない。因みに，アストン，ヘボン，サトウは退会後，名誉会員となったが，B. H. チェンバレンは「生涯会員」，J. バチェラーは「札幌会員」となっている(注14)。

サマーズは *Transactions* に合計4本の論文を投稿した。上記の〝Notes on Osaka〟のほか，1884年第12巻に〝On Chinese Lexicography, with Proposals for a New Arrangement of the Characters of that Language〟(p.166-p.181)，1886年第14巻には2本の論文，〝Buddhism, and Traditions Concerning its Introductions into Japan〟(p.75-p.82）と〝An Aino-English Vocabulary〟(p.186-p.232)が掲載されている。1884年の論文は，中国語辞書の編纂に向けての漢字配列に関する研究と提言を行なったものである。漢字の起源を印欧語の文字の歴史と重ねて考察することから始まり，後漢の許慎による字典『説文』を参考に六書を取り上げ，説明している。『説文』のほか，『玉篇』，『類篇』，『字彙』など10種類を信頼で

きる字典として挙げている。当時の中国語研究の中で，サマーズが共感し，関心を持ったのは，1867 年に発表された，サンクトペテルブルグ大学の Wassilieff 教授の漢字の書き方に関する研究だった。漢字を書く筆の運び方に注目し，配列の順序を示すものであった。中国語辞書の刊行には至らなかったが，その準備は進めていたものと想像できる。1886 年に書いた 2 本のうち，始めの論文は「日本に伝来した仏教の歴史」と日本の社会への浸透について書いたものである。もう一本は「アイヌ語ー英語語彙集」で，幌別，カムチャッカ，樺太，などの方言も含めて多くの語彙が 46 頁にわたり収録されている。蝦夷語箋ほか，シーボルト，バチェラーからの資料を基本に収集したことが緒言に記されている。1884 年というと，すでに最後の大学講師を務めた札幌農学校の契約を終え，東京築地居留地に移り住み，自宅で欧文正鵠学館という英語学校を経営し始めた頃である。来日以来，様々な形で日本人や駐日公使館関係者，お雇い外国人研究者，宣教師との交流を通して多くの人々とのつながりを得た彼は，再び，私塾で教育者として新たな道を歩むことになる。

4）その他の刊行物について

サマーズが大阪にいた 1879 年に，オックスフォード大学ボドレアン図書館（Bodleian Library）に寄贈したと見られる資料がある。それは，*Japan Weekly Mail* という名前でサマーズが日本からヨーロッパに発信したニュースレターのような刊行物である。1879 年 10 月号には，〝Education in Europe and Japan″というタイトルの記事があり，その表紙には，With Compliments of J. Summers, Osaka というサマーズが書いたと思われる手書きのサインが見える（図 5 参照）。その内容はヨーロッパ教育史の概観とその中におけるイギリスの教育とヨーロッパへの影響，さらに体育，知育，徳育の重要性について説いたものである。そして，日本人に対する教育について，国の発展のために知力の向上を図る努力がなされているとして，将来性に期待する意見を述べている。同時に，多くの学校が開かれ，外国人の学者からの知識を吸収する日本人への忠言として，異なる意見を


EDUCATION

IN

EUROPE AND JAPAN.

A SERIES OF ARTICLES CONTRIBUTED TO THE

"JAPAN WEEKLY MAIL."

図5　"Education in Europe and Japan", Japan Weekly Mail, October 1879（Bodoleian Library 蔵）

立てることが少なく,従順でそのまま受け入れることは国民性でもあるが,自らの力や考えを表すことなくして外国に倣うことは国の弱体化につながるという懸念も示している。サマーズ自身，お雇い外国人として来日し，教育者として日本人に接触する中で日本人への理解を深めていったと思われる。行間に日本人に対する期待と共感が読み取れる。後半には日本人の英語教育について，自身の英語，英文学教授としての経験も踏まえた意見が述べられている。文部省は英語を正確に，また流暢に使える日本人を教育するのに相当の努力を惜しまなかったが，東京大学や工部大学校においてもさらに研究を進めるための手段として英語を使いこなせる日本人の数は十分ではないという問題の指摘や，生徒には上質の教材を用意し，不正確な口語英語は聞かせないようにし，日本語から正確な英語への翻訳，日

英の慣用表現の翻訳などができるような環境を整えることを提言する内容である。最後に再び一般的な教育論を展開し，７頁に及ぶこの小論文を締めくくっている。

4　ジェームス・サマーズの教育者としての評価

Oxford Dictionary of National Biography（Oxford University Press, 2004）にサマーズの人物紹介が載っているが，特に人物像と生活状況が描かれている部分がいくつかある。

> Summers, James (1828—1891), Sinologist and teacher of English in Japan, …… (中略)
> This incident (*at Macao) showed the stubborn and volatile character that persisted throughout his life…… (中略) ……Since his salary was minimal, he had to find other employment, and he worked for the India Office Library and the British Museum as an assistant …….. He was a pioneer of English literature in Japan and is particularly known as the person who introduced Shakespeare to the country…….

ここでは，サマーズは中国語研究者で，日本では英語教師であったと紹介されている。後半では，日本の英文学の開拓者で，取り分け，シェークスピアを日本に紹介した人物という，重久篤太郎や豊田実らの研究(注15) を参考にした説明がなされている。しかし，King's College に赴任前のマカオでの事件で見られた「頑固で気難しい」性格をサマーズは生涯貫いたということ，さらに印度省や大英博物館で助手として働いたのは大学の給料が安かったためだとする記述は，サマーズの人物評価にも関わる部分なので，より慎重な検証が求められる。なぜなら，別の見方もあるからである。マカオの事件では Henry Keppel の日誌（1849 年）でサマーズに責を帰す

べきでない(注16) という主張がある。さらに，大英博物館の助手の仕事が家計を助けるためだったとは思えない。むしろ，当時，中国や日本を始め，アジア諸国の文化，文明に関する資料や情報の収集に強い関心があったから，大英博物館や印度省とのつながりを望んでいたと考えるのが自然であろう。事実，その後，*The Chinese and Japanese Repository* や *The Phoenix* の編集，刊行に全力で取り組み，大きな研究実績としていったのである。重久篤太郎(1941)は，「1852年から1873年に至るまでの20年間に，サマーズは全精力を挙げて日支研究に傾注し，多くの研究出版や日支事物研究を刊行した。ために，多額の費用を要し，財政上の窮乏と闘わねばならなかった」(pp.350-351) と説明している。

教育者サマーズについては，開成学校時代と札幌農学校で英文学や論理学の教えを受けた人々の，懐古談や日記に記録されたものから窺うことができる。開成学校の学生であった船越（井上）哲次郎（1855―1944）は，雑誌『太陽』の日英大博覧会記念号に，当時を回顧して最も記憶に残る教師として，サマーズの名を挙げた。「……私等は歴史文学を教わった。このサンメル氏は中々博学の人で余程文学の趣味があった。……（中略）文学の趣味のある人の事とてその教授も面白く感ぜられた。文学者というものは概して癖のあるものだが，このサンメル氏も余程癖があった。室の風通の工合などにひどく心配したやうで少し寒い風が来ると心配し，ストオヴの火が強すぎるとこれまた心配するやうな余程寒暖に神経をいためるやうな気味があった。けれども私達殊に自分は氏に知られてよく問題を出された。随分大勢のクラスであって問う可き人が多かったのであるが其内何人かがよく氏に問いかけられた。私は氏の学識に信服していたので，癖のため，どうということもなかったのである」(注17)。明治8年2月付『東京開成学校一覧』の教員名簿には，「文学教授　レヴェレンド，ゼームス，ソンマルス」(Reverend James Summers) とあり，上の井上談と照らし合わせると，船越（井上）哲次郎は予科課程の同じクラスの学生21名と英文学，史学（英国史）などをサマーズから熱心に教育されたことが推測される。

開成学校との雇用契約が終了してから，サマーズは新潟英語学校，大阪

英語学校で英語教授として赴任した。しかし，この間の教育研究活動を示す資料が少なく，前述の *Transactions of Asiatic Society of Japan* 第7巻（1879年6月）の〝Notes on Osaka″と The Japan Mail 社の *Japan Weekly Mail* に掲載された，〝Education in Europe and Japan″（1979）がこの頃発表されたものである。前章で内容について紹介したが，前者は日本の近世，近代史への興味，後者はヨーロッパと英国の教育史，また日本との比較教育，さらに日本の英語教育についての論考である。これまでの大学教育の経験と知識の蓄積が垣間見える。明治13（1880）年から15（1882）年6月まで英語学教授として赴任した札幌農学校時代の教育活動については，重久篤太郎（1941，1968），外山敏雄（1992）らの研究(注18)のほか，「札幌農学校史料」（『北大百年史』），*Fifth Annual Report of Sapporo Agricultural College*（Kaitakusha, 1981），『在札幌農学校第弐年期中日記』（志賀重昂の日記）などの資料から窺い知ることができる。その中から，いくつか教育者としての評価につながる点を見ていきたいと思う。*Fifth Annual Report*（上述）のサマーズの授業報告によると，彼が札幌農学校で教えていたのは本科1年目のクラスが中心で，読解，英作文，文章表現（修辞法），発声法，書き方などを教えたという。本科生の1年目の学生達は学習態度やよく意欲的だと学生を高く評価している。また，彼は本科以外にも自主的に予備課程の3クラスを週に18時間指導したこと，学生達が外国人教師の指導を求めていることや自身の日本語能力が学生の英語理解に役立ったということも付記している。報告書の記述からわかることは，サマーズは開成学校時代と違い，（英）文学教授でなく，Professor of English（英語教授）として雇用されており，初年度は上記の語学系科目を担当したが，教材として *Lord's Modern History of Europe*（歴史―読解），*Elements of Rhetoric by Flon*（修辞法―文章表現），〝some good passage from an English classical author″（発声法に「英語の古典的名文」）など文学，歴史の内容を積極的に取り入れたことである。当時の4期生であった武信由太郎（1863―1930），志賀重昂（1863―1927）ほかの談話や日記から，サマーズは2年目には文学作品の暗誦を通して英文学の内容を中心に指導したこ

とが窺える。英語授業の文学系の教科書については，重久（1941），外山(1992)の先行研究である程度明らかにされており，ここでは詳しく述べる必要はないが，４期生の中でも特にサマーズの影響を受け，英字新聞記者や編集者，あるいは政治思想の言論指導者となっていく武信由太郎，頭本元貞(1862―1943)，志賀重昂らがどのような教育を受けたかについては興味が引かれる。武信が「……私共はマコーレーの *Lays of Ancient Rome*，ゴールドスミスの *The Deserted Village* やグレーの *Elegy* などを盛んに暗誦させられた。また，教科書としてはアンダーウッドの British Authors の講義があった……」という懐古談を雑誌に発表した(注19)が，志賀重昂もこれに近い内容を『在札幌農学校第弐年期中日記』（明治14年７月～明治16年５月）に書いている――「十月十五日（明治14年）土，『マッコーレー』ノ『ホラチュス』行ノ西詩ヲ『サンマース』氏ノ前ニ誦ズ……」「十一月十二日　土，『サンマース』氏ノ課業中，『ホラチュス』ノ羅馬行ヲ誦ズ」「十一月十七日　木，『サンマース』氏ト事アリ，『グレー』ノ『エレジー』ヲ同氏ノ教授ニテ始ム」(注20)。このあとも何度か「ホラチ(ュ)ス」（Horatius），「羅馬行」（Lay of Ancient Rome）といった著者名，書名が出てくることから，学生達は何度も繰り返し暗誦させられていたことがわかる。

このように，サマーズは英文学の指導を通し，札幌農学校の第４期生の学生達にヨーロッパ流の教養と世界観を学ばせたのである。その結果，特にサマーズに感化されたと思われる志賀重昂，武信由太郎，頭本元貞は，いずれも国際的な感覚をもった日本を代表する学者，編集者，政治思想家となっていった。教え子達の残した日記や談話資料から，サマーズは多少頑固で偏屈な性格を有していたようであるが，中国と日本，あるいはアジア諸国への関心と知識をもち，しかも西欧の文化歴史に造詣が深い，類稀な教師であったに違いない。重久篤太郎（1941）が論文の最後にこう結んでいる。

> 英文学研究の草創期乃至啓蒙期において英吉利文学研究を開拓誘導したその顕彰すべき功績は大きい。更に遡って来朝以前に於ける彼の日

本文化を海外に紹介せる業績，降ってはその私塾よりあらゆる階級を網羅し数千の多きに達する修業生を出した英語教育界への寄与などは，相応にこれを認識しなければならない。この意味に於いてサマーズは日本英文学研究史上のみならず，近代日本文化史上においてもその業績を録すべき人物であると言わねばならない。(p.372)

日本語・日本文化に対する彼の研究については日本で触れられることがほとんどなかった。雑誌編集者としては，代表的な *The Chinese and Japanese Repository* と *The Phoenix* のほか，日本語で書かれた『大西新聞』(*Taisei-shimbun*) などを通して日本と中国を中心とした社会，文化，文芸関係の情報をヨーロッパに紹介したことは知られるが，前者 2 点の内容については日本であまり取り上げられることはなかった。本稿では，サマーズの King's College 時代の状況をこれまでに明らかにされなかった部分を含めてより詳しく見てきた。また，英国時代と来日してから発表した論文，エッセイ，書評，報告文等の内容を確認しながら，いかに日本とヨーロッパをつなぐ情報媒体者として貢献したかを示したつもりである。同時にサマーズ自身の知性と教養の豊かさも多くの弟子から敬服された所以であり，近代の多くの知識人を育成した教育者として高く評価されるべきなのは言うまでもない。

注　釈

（注 1 ）Hyak Nin Is'shiu, or Stanzas by a Century of Poets, being Japanese Lyrical Odes, 1866, published in London by Smith, Elder, & Co.

（注 2 ）当時，日本人留学生が数十名ロンドンに在住，日本語情報誌の需要はあったという。

（注 3 ）King's College 評議員議事録には，1853 年赴任となっている。『近代文学叢書』 2 号には 1852 年とあるが，誤りであると思われる。

（注 4 ）1849 年 6 月 7 日，澳門での聖体節の行列に巻き込まれ，サマーズが脱帽の指示を拒否したため流血事件へ発展した。

（注 5 ）重久篤太郎「日本英文学研究の先駆」p.348，『日本近世英学史』，1941

(注 6) *The Chinese and Japanese Repository* (Yushodo, 1967) 解説 (D. Brown) p.2

(注 7) 同　p.4 (Dr. Rheinhold Rost の経歴など)

(注 8) 同　p.7

(注 9)『欧米から見た岩倉使節団』，イアン・ニッシュ編(麻田貞雄他訳)，2002 年，pp.51-71

(注 10) 重久篤太郎 (上掲) pp.351-352

(注 11) 米人宣教師 J. リギンズが長崎で出版した実用的会話書で，先駆的な役割を果たした。

(注 12) 千葉宣一 (「慶応，明治，大正期における『百人一首』の英訳」『人文論集 26／27 号』，北海学園大学，2004 年) の解説を参照

(注 13) 菊池大麓 (1855―1917)，当時ロンドン大学留学生，数学者，文相，東大総長歴任

(注 14) *Transactions of Asiatic Society of Japan*, Vol. 21-22 (1893-1894)に記載

(注 15) 豊田実『日本英学史の研究』，1939 年

(注 16) *A Sailor's Life under Four Sovereigns*, by Admiral Sir Henry Keppel, 1899

(注 17) 井上哲次郎談「余が記憶に存せる二三の英国人」，『太陽』明治 43 年 6 月 15 日号

(注 18) 重久篤太郎『日本近世英学史』(1941)／『明治文化と西洋人』(1987) 外山敏雄『札幌農学校と英語教育』(1992) ほか

(注 19)『英語世界』第三巻，第一号，明治 42 年

(注 20)『朝天虹を吐く―志賀重昂「在札幌農学校第弐年期中日記」』pp. 128-145，亀井秀雄・松村博著，1998 年